

コンパニオン・アニマルとしてのイヌが人々に与える心理的・社会的影響

The role of dogs as companion animal in human society; psychological and social influences.

金井 正美
Masami Kanai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : イヌ, 心理, 社会
Key words : Dog, Psychology, Social

1. 研究目的

本研究の目的は、心理臨床場面においてイヌを介在させることに対する応用可能性を検討することである。

そこで、まず本論では図 1 に示す通り、動物が人にもたらす効果および、社会的潤滑油としての動物、心理臨床における動物介在効果についてこれまでの知見を概観し、本研究で明らかにしたい問題を整理する。その上で、研究 1 として対人場面にイヌを介在させることによる影響を実証的に検討し、研究 2 としてイヌを心理臨床場面に介在させることについて、臨床心理士、獣医師等を対象にインタビュー調査を行い、心理臨床場面でのイヌ介在療法導入の可能性と問題点を明らかにする。

| | |
|-------------|--|
| 第1部 序論 | 第1章 問題の所在 第1節 動物が人にもたらす効果 第2節 社会的潤滑油としての動物 第3節 心理臨床における動物介在効果 第2章 本研究の目的 |
| 第2部 実証研究 | 第3章 イヌの介在による社会心理学的影響の実験調査 (研究1) 第4章 専門家へのインタビュー調査 (研究2) |
| 第3部 総括 | 第5章 総合考察 第1節 本研究の目的と各章で得られた知見 第2節 本研究からの実践的示唆 第3節 今後の展望 |

図 1 本論文の構成

はじめに

動物を人の健康に役立てようとする試みは昔からある。古くは、古代ローマ時代にまでさかのぼり、傷ついた兵士のリハビリに乗馬が用いられていたという記録もある。古代から近代にいたるまで、動物を介在して人の健康に役立てる試みは続

けられてきたが、その有用性は語り継がれるだけで実証的に報告されたものはなかった(門多, 2015)

「アニマルセラピー」の報告を最初に行ったのは、心理臨床家である Levinson (Levinson, 1962) である。Levinson は、情緒的に問題を持つ子どもに対する心理療法を試みていたが、その子はなかなか心を開かず、引きこもりがちで治療がうまく進展しないまま長引いていた。ある日その子どもが約束の時間よりずっと早く治療室に来たとき、偶然その部屋にいた Levinson の飼い犬が子どもの方に駆け寄り、大歓迎したことがあった。そのことをきっかけに子どもの方も心を開くようになり、その後治療者とも良好な関係を形成することが可能となり治療の進展がみられるようになった。このような経験から Levinson は子どもの心理療法において良い治療関係を作るためにイヌを用いる試みをするようになった。このような Levinson の実践が動物を子どもの心理療法に意図的に参加させる活動の始まりとなった(宮川, 2013)。

動物が人にもたらす効果

動物が人の心身へ与えるポジティブな効果を「治療法」として体系化し、積極的に活用しようとするのが「動物介在療法 (Animal・Assisted・Therapy)」である。この動物介在療法は、「動物介在活動 (Animal・Assisted・Activity)」の下位概念として位置づけられる。「アニマル・セラピー」という名称はこの両者を混在したものであり、概念の明確化および用語の統一は今後の課題とされている(磯邊, 2003)。

門多 (2015) は、動物介在療法・活動による効果を、心理的效果、身体的効果、社会的効果の 3 点に大別できると述べている。心理的效果とは、

自己認識や情緒面の改善のことを示し、人が動物とのかかわりの中で、自信や自尊心を高めたり、自己効力感を向上させるほか、不安やストレスの軽減にも役立つと言われている。身体的効果は、病気からの回復、血圧や心電図などの正常化、四肢の麻痺などの改善効果のことを示し、動物と接することによる身体の緊張軽減の効果が提示されている。社会的効果は、他者との会話の増加などの対人関係の改善効果のことを示し、例えば、対話場面に動物がいるとき、動物を介した話題が増えることで会話の促進が期待できる(横山, 1996)。

門多(2015)はさらに、この社会的効果が、心理臨床を円滑にすることに結びつく可能性も示唆している。

社会的潤滑油としての動物

動物を心理臨床の現場で用いることによって、2つの効果が期待される。一つは、動物の存在自体がクライアントに働きかけ、その治療を促進する効果であり、もう一方は、動物の存在がセラピストの行うセラピーを援助し、効果を促進することである(Pavlidis, 2009)。なぜ、動物の存在がセラピーを援助し、効果を促進するのであろうか。

その理由の一つとして横山(1996)は、動物の存在は人間と人間の緩衝材や潤滑油(社会的潤滑油)としての効果があり、これは動物介在療法・活動の最も大きな効果の一つであると述べている。同様に、先の Levinson(1969)も、心理臨床の現場での動物の役割は常に同じものではなく、次第に変化するものであると定義している。つまり、治療の初期では、動物はクライアントとの関係を築きセラピストがその補助役にまわるが、最終的には、動物がその位置をセラピストに譲り、クライアントとセラピストの関係の補助役にまわる、というのである。さらに、門多(2014)は、動物と人の関係を考えるうえで忘れてはならないのは「動物」と、「人」と「人」の関係であると述べ、「動物」が介在物(中継地点)として関わることで「人」と「人」の関係をより円滑にすることができる。つまり、「人」と「動物」と「人」の三者関係で考えなくてはならず、人と動物の単純な二者関係だけでは起こりえない複雑な事象が、そこには存在していると言う。

現在、日本において動物介在療法・活動の多くは、「動物と人がふれあうことで人の問題が治療できる」という認識をされており、「人」—「動物」—「人」の三者関係の存在が忘れられた、本質と

は異なる理解となっており、今後、動物介在療法・活動について明確な周知が必要とされている(門多, 2014)。

心理臨床における動物介在効果

実際、心理療法の現場に動物を取り入れることは古くからあり、例えば、精神分析の創始者である Freud,S.は自身の飼い犬をセッションに同席させていたし、(John Homans, 2014)日本においても、森田療法でその治療のプログラム中に動物の飼育が取り込まれている(門多, 2015)。

しかし、実証的な論文は長い間発表されず、世評のようなかたちで語り継がれるのみで、決め手に欠ける状況が続いていた。動物を介在させた人の治療における効果についてきちんと検討するようになったのは、ごく最近のことである(門多, 2014)。

しかしながら、人と人との関係を円滑にする効果である社会的潤滑油としての動物の効果に焦点をあて、人々の心理的・精神的変化を実証的に検証した研究はほとんどみられていない。

局(2013)は、馬介在療法のこれまでの研究を概観し、身体的な効果は蓄積されつつあるが、心理的・精神的効果については、その効果を直接証明した研究報告は見当たらないとしている。心理的・精神的効果の検証のためには理学療法、作業療法、内科、臨床心理、リハビリテーション学などさまざまな分野における知見が集積されることによって全体像が描かれるようになると述べている。同様に、横山(1996)は動物介在療法・活動は獣医学と医学のドッキングであり、さまざまな領域の知識を持った人が集まって、互いの知識に関心を持って取り込み、共有知を持つことで成立すると述べている。

以上から、動物を対人場面に介在させたときに生じる社会的潤滑油効果を心理臨床場面に応用できる可能性があると言える。しかし、我が国における動物介在療法・活動に関する研究の多くは、獣医学や動物行動学の領域で行われており、心理学的な視点から動物の社会的潤滑油効果を実証的に検証している研究は少ない。また、動物介在療法・活動に関係する専門職である、獣医師、医師、療法士、臨床心理士が動物介在療法・活動についてどのような知識や印象を持っているのか、また、現場に動物を介在させることについてどのような期待や不安を感じているのか、その実態を調査した研究は見られていない。

そこで本研究では、人と最も絆を結びやすいとされているイヌを介在動物として、研究 1 と研究 2 の二つの実証研究を実施する。まず、研究 1 では日常の公共場面である職場にイヌを介在させる実験調査を行う。この研究では、人と人の間にイヌが介在することにより、どのような影響が生じているのか、心理学的な視点から「人」— [動物] — [人] という三者関係で生じる複雑な事象の検討を試みる。次に研究 2 として、動物介在療法・活動に関わる専門職の人々にインタビュー調査を行い、心理臨床場面においてイヌを介在させることに対する応用可能性を探る。

2. 研究実施内容

研究 1

目的

社会的潤滑油としてのイヌに焦点をあて、人と人の間にイヌが介在す

ることによる影響を心理学的な視点から実証的に検証する。

方法

- ・調査時期：2018 年 3 月～5 月頃
- ・実験期間：実験の実施は 4 日間（事前・事後の質問紙およびインタビュー調査あり）
- ・調査対象：A 社社員様 20 名（女性 16 名・男性 4 名）
- ・調査方法：実験の流れを図 2 に示す。実験期間中は、イヌと触れ合う日とイヌがいない日を交互に設定する。イヌとの接触方法は、以下の 2 つのパターンを想定する。一つは、会社内のオープンスペースに、イヌと触れ合うことのできるスペースを用意する。一つは、デスクワークを行うスペースに、イヌが自由に出入りできる時間を設け、実験協力者が仕事をしながらイヌに触れることができるようにする。実験期間中は、日本版 POMS 短縮版を用いて、イヌの介在による心理的な影響を検討し、定点カメラで職場内を撮影することによって、イヌの社会的潤滑油効果を検証する。また、バイタルセンサーにより得られたデータを解析することによって、生理的な影響についても検討する。また、介在実験終了後に実験協力者に個別にインタビュー調査を実施し、イヌの介在により対人関係にどのような影響があったのか、質的に明らかにする（現在、倫理申請中である）。

現状

研究計画を立案し、現在実験にご協力いただく

企業と実験の詳細を調整中。4 月～5 月に実験調査を実施する予定となっている。

研究 2

目的

動物介在療法・活動に関係する専門職の人々が動物介在療法・活動についてどのような知識や印象を持っているのか、また、現場に動物を介在させることについてどのような期待や不安を感じているのか、その実態を調査する。

方法

- ・調査期間：2017 年 9 月～
- ・調査対象：各領域の専門家 10 名ほど
- ・調査方法：インタビュー調査
- ・調査項目：①動物好きか否か、動物の飼育経験②動物介在療法についての知識③現場に動物を介在させることについて④動物介在療法導入への賛否⑤動物介在療法が有効と考えられる場面⑥現場に導入する際に困難な点・有益な点⑦他の動物・非生物について（イルカや馬、ロボット等）など。
- ・インタビュー所要時間：30～90 分
- ・分析計画：KH コード、共起ネットワークによる分析

現状

現在、臨床心理士 2 名、老人福祉施設の職員 4 名、獣医師 1 名にインタビューを実施済み。今後、他領域の専門家にもインタビューを実施し、得られたデータを解析する。

3. まとめと今後の課題

研究 1 は現在、倫理審査中であるため、審査が通り次第、実施する予定で準備中である。さらに、可能であれば別の企業においても実験を実施し、データ数を増やすことで、結果の客観性が高められると期待される。

研究 2 においては、すでに実施したインタビューのデータ解析を進め、可能であれば他領域の専門家へのインタビューも追加し、動物介在療法・活動に関わる専門家による発言を様々な角度から検討したいと考えている。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 29 年度大学院生研究助成(B)(DB2909)より研究助成を受け行った。

主要参考文献

- [1] 磯邊 聡・前田瑞枝(2003).イヌとの接触が気分およびイメージに与える影響について—好悪感情という観点からの検討— 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 219-223.
- [2] 門多真弥・森阪匡通・小木万布・古田圭介・亀崎直樹・大矢 大 (2015).イルカ介在療法のこれまでとこれから 京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要, 9, 43-51.
- [3] 門多真弥・森阪匡通・亀崎直樹・大矢 大 (2014). アニマルセラピーとしての“イルカ療法”—イルカとのふれあいを通じて— 京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要, 8, 55-60.
- [4] Levinson.B.M.(1962). The dog as a "co-therapist" Mental Hygiene, 179. 46-59.
- [5] Levinson.B.M.(1969). Pet-oriented child psychotherapy Charles C.Thomas Publisher. (川原隆造訳(2002).子どものためのアニマルセラピー 日本評論社)
- [6] 宮川治樹(2013). アニマル・セラピーって……？—動物介在活動総論として— Journal of Animal and Therapy, 4, 9-16.
- [7] Pavlides.M.(2008).Animal-assisted Interventions for Individuals with Autism Jessica Kingsley Publisher. (古荘純一・横山章光訳(2011).自閉症のある人へのアニマルセラピー 明石書店)
- [8] 局 博一(2013).馬介在療法の健康効果に関するオーバービュー 動物介在教育・療法学雑誌, 4(1・2).
- [9] John Homans 著 沖 達志訳(2014).『犬が私たちをパートナーに選んだわけ：最新の犬研究研究からわかる,人間の「最良の友」の起源』 阪急コミュニケーションズ.
- [10] 横山章光(1996).『アニマルセラピーとは何か』 日本放送出版協会.
- [11] 一般社団法人ペットフード協会.H29 年全国犬猫飼育実態調査—「主要指針サマリー」
<http://www.petfood.or.jp/data/chart2017/index.html>

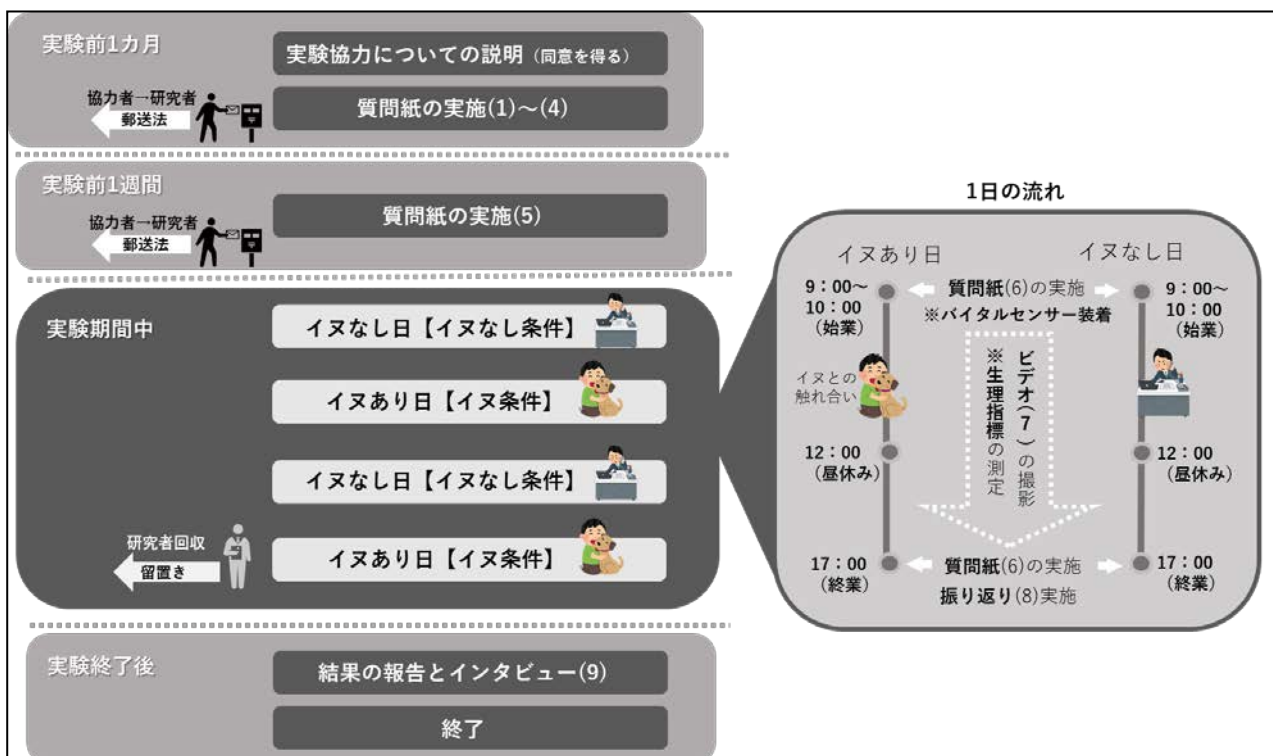


図 2 研究 1 実験の流れ